

根本現象とは何か

—若きゲーテの自然体験と「純粹」体験—

高橋 義人

1

若きゲーテは何度も旅をした。生家のあるドイツ・フランクフルトからライプツィヒ大学に向かう旅、シュトラスブルク大学へ向かう旅、ヴェッツラーに法律の仕事で向かう旅などである。旅の途中、彼は美しい自然の風景に触れ、自然を愛した。旅先では美しい女性に出会い、彼女を愛した。彼は何人もの女性を愛したが、特に知られているのは、ヴェッツラーで出会ったシャルロッテ・ブッフへの恋である。自然に出会い、女性に出会い、自然を愛し女性を愛した。そしてこの二種類の愛が若きゲーテを飛躍的に育てた。

青春は、恋愛と留学と山登りの3つに端的に表れる。この三者に共通しているのは、愛と情熱である。生きるとは愛することだ。夢中になって何かに挑むことだ。恋愛と留学と山登りの根底には情熱の発見がある。情熱のない人生は無である。

若きゲーテはなかなかハンサムで、多くの女性に慕われたが、ゲーテ自身も何度となく恋をした。フランクフルトからライプツィヒ大学やシュトラスブルク大学に行ったのは、半ば留学である。そして登山とは言えないかもしれないが、野原をあちこち馬でかけまわったり歩きまわったりして、ゲーテは自然に親しんだ。

恋愛にせよ、留学にせよ、山登りにせよ、それらはすべて障害の克服という性格を有している。障害が大きければ大きいほど、それを克服しようとして情熱は燃えさかり、青春は豊かになる。青春をお花畑のように思いこんでいる人たちがいるが、それはかならずしも正しくはない。正確には、青春はいばらのお花畑である。

胸に突き刺さるいばら、乗り越えなければならぬいばらの道が一番強いのは恋愛である。恋愛は、「ああ、これが恋というものなのか」というため息とともに始まる。それはいばらが胸に突き刺さった瞬間である。だが、いばらが胸に突き刺さることによって、人は自我に目覚める。恋に落ちたゲーテの視線はまずシャルロッテ・ブッフに向けられた。と同時に、シャルロッテ・ブッフを恋慕う自分の内なる熱い心に向けられた。心は熱く燃えたぎり、まるで心のなかに竈があるかのようだ。そしてこの心の竈が赤々と燃えているかぎり、万物は生き生きとして見える。近くまで歩いていくときの自分の足取りも、口のなかにサンドイッチを入れる動作も、すべてが昨日とは違った生彩を帯びて感じられる。そしてゲーテには、シャルロッテ・ブッフはもとより、通りすぎる農家の人々も、みな美しく見えた。人生は美しい、と彼は強く思った。そして自然もまた美しく輝いて見えた。

自然を知るには、実際に野原や山のなかを歩きまわらなければならない。テレビや写真で美しい風景を見ても、自然は分からない。実際に歩きまわり、汗をかかないと、自然は見えてこない。自然を見るには身体が必要である。身体が自然のなかに包まれ、身体と自然がどこかでつながっていると感じられなければならない。そう感じたとき、自分は自然のなかの

ちっぽけな存在であること、だが、そのちっぽけな存在が大いなる自然のなかでいま輝いていることが分かる。それが、自然体験である。

ゲーテ時代の旅行の乗り物は、馬か馬車だった。ゲーテは馬に乗って出かけることが多かった。馬での旅では、電車や自動車での旅よりも身体が強く関与する。両ふくらはぎに力を入れ、馬の腹を押し、馬に進めと合図を送る。そうやって全身で自然のなかを走りまわるのだ。乗馬でなくてもいい。全身を使って山や野原を歩き、トレッキングしていると、いつの間にか頭のなかがあっぴやになる。スマホも忘れ、時間も忘れ、仕事の上の煩わしいこともいつの間にか忘れてしまう。すると、自然が美しく見えてくる。自然の美しさが分かるには、心が無になることが必要である。

山や野原を歩いているとき、自分の周囲の景色は流れ去ってゆく。車や電車でもそうだ。ゲーテは馬に乗っていた。馬に乗っていると、自然の風景は後方に流れ去ってゆく。自然が生き生きと動いているように見える。

そしてその自然が美しいと、心は喜びにあふれ、眼は食い入るようにしてさらに自然に見入る。今日、フランクフルトの町は決して美しいとは言えないが、フランクフルトの郊外、ヘッセン州の自然風景はまことに美しい。ヴェッツラーも美しい。ちなみにゲーテが後年移り住んだヴァイマルも田園光景のじつに美しいところで、しばしば「東のトスカーナ」と呼ばれる。ヨーロッパには「ロークス・アメーヌス」（優美な土地）という有名なトポスがある。ギリシアのアルカディア、フィレンツェ郊外のトスカーナ、イギリスのコッツウォルズなどがその代表であるが、ヘッセン州やヴァイマル近郊（テューリンゲン州）の「東のトスカーナ」はイタリアのトスカーナに劣らず美しい。緑の丘がゆるやかに起伏する眺めである。フランクフルト空港からヴァイマルまでは特急で2時間半ほどの距離で、ヴァイマルに着くまで、私は車窓から見える景色に飽きることなく見入るのが常だ。

そういう自然体験を若きゲーテは小説『若きヴェルターの悩み』のなかにはっきりと書き記した。

春の朝の甘い大気を胸一杯に吸いこむときのように、ぼくの心はいま、不思議な爽やかさに包まれている。ぼくは今まったくひとりきりで、ぼくの魂のためにつくられたのではないかと思われるようなこの地で、自分の生活を楽しんでいる。でも、友よ、ぼくはとても幸福だし、安らかな存在感情にすっかり身を委ねてしまっているだけに、芸術のほうはうまくゆかない。絵を描こうとしても、今は一筆も描けないだろうと思う。ところがぼくが今ほど偉大な画家であったことはない。うるわしい谷間は身のまわりにけぶり、暗い森のなかには頭上の太陽も光を射しこむことがなく、森のなかの聖域にかすかに洩れてくるのは、幾筋かの光線にすぎない。そんなときぼくは、勢いよく流れてゆく谷川のほとりの丈高くしげった草のなか身に身をひそめ、大地により近いところで、幾千ものさまざまな草の姿に眼をとめ、茎と茎とのあいだにあるささやかな世界のうごめきや、小さな虫けら、蚊などの無数の測り知れない姿をずっと胸の近くに感じ、そ

してまた自分の姿を元にしてぼくたちすべてをつくってくださった方の存在を、永遠の歓喜のなかに漂いつつ、ぼくたちを担い、養い、ものみなすべてを愛してくださる方の息吹を感じることができる。友よ、すると夢をみているような心持になってきて、周囲の世界と天空とは、恋人の姿のように、ぼくの魂のなかにすっぽりと安らってしまう。そんなとき、ぼくはしばしば切ないあこがれに駆られ、自分にむかってこう叫ぶのだ。ああ、ぼくの内部にこんなにも豊かに、こんなにもあたたかく生きているものを再現し、画紙の上に甦らせることはできないものか、そうできれば、それはぼくの魂の鏡となるというのに、ちょうどぼくの魂が無限なる神の鏡であるように、と。友よ、だがぼくはそう思ったとたんにくずおれてしまう。これらの現象の素晴らしい力に押しひしがれてしまうのだ。

(『若きヴェルターの悩み』 第一部 1771年5月10日)

若きヴェルターが神の存在、神の息吹を感じると、周囲の世界は彼の魂のなかにすっぽりと安まってしまう。自分のなかに神的なものがある。そして周囲の自然のなかにも神的なものが満ちている。神的なものによって自分は自然とつながっている。自分と自然はひとつだ。そう感じる。これが、若きゲーテの汎神論体験である。そしてこの汎神論体験において、自己意識は特に強められる。しかもその自己は呼気と吸気という呼吸がそうであるように、自己強化と自己脱却、自己充満と自己無化という2方向において現われる。神的なものを通して世界と天空が「ぼくの魂のなかにすっぽりと安らってしまう」と感じる時には自己強化であるが、神的な世界に自己を委ねてしまうと、自己脱却になる。

自己強化と自己脱却というのはゲーテの言葉である。『詩と真実』第2部第9章のなかに彼はこう記している。

神的なものは、われわれが一方では自己強化に励み、他方では自己脱却を怠らないように努め、そうした規則正しい脈拍を続けることによって実現されるのである。

恋愛において自己強化と自己脱却は交互に現われる。恋する男性は女性に、「ぼくと結婚してください。かならず君を幸せにします」と言う。わが身を犠牲にしても彼女を幸せにしようというのであるから、これは「自己脱却」である。ところが映画『釣りバカ日誌』の主人公のハマちゃんが奥さんのみち子に求婚したとき、彼は、「ぼくはあなたを幸せにすることはできないかもしれない。だけど、ぼくはあなたと結婚したら必ず幸せになる」と言った。エゴイズムと聞こえるかもしれないが、これはそれなりに恋愛の真実を衝いている、それは「自己強化」である。そしてこの真実がみち子の心を捉え、彼女は彼との結婚を承諾した。

若きヴェルターは世界を恋人になぞらえ、「周囲の世界と天空とは、恋人の姿のように、ぼくの魂のなかにすっぽりと安らってしまう」と言っている。恋愛において人は自分のすべてを愛する人に捧げたいと思うと同時に、世界のすべてが自分の胸のなかに収まってしま

う、と感じる。汎神論体験においても、恋愛において、人は自己放棄と自己強化が呼吸のように交互に繰り返されるのを体験する。

自己放棄と自己強化。1773年、『若きヴェルターの悩み』とほぼ同時期にゲーテはそれを劇詩断片『プロメテウス』と頌詩「ガニメート」に描いた。自分のなかに神を感じたゲーテは、大事なのはこの体験であり、教会で教えられているような神ではない、と感じた。むしろ、当時のヨーロッパでキリスト教に対する反抗を公然と口にすることはまだできなかった。そこでゲーテはキリスト教の神を古代ギリシアの神々に、自分をプロメテウスになぞらえた。自己強化の極にあるプロメテウスは、世界は天上の神によって創られたものではない、神は自分の胸のなかにあり、自分とそれを取り囲む世界が世界のすべてである、と言う。イエスもムハンマドも聖フランチェスコもそう感じたのだらう。人それぞれ自分の世界を持っており、それ以外の世界があるわけではない。この世界の背後にもうひとつの世界があるなどというのは、まやかしである。プロメテウスはそう気づいた。そして若きゲーテも思った、キリスト教のいう背後世界は真っ赤な嘘である、と。以下の引用で「父」は暗にキリスト教の「われらの父」を指している。

プロメテウス：父だ、母だというのか。

[.....]

俺をひとかどの男にしてくれたのは

俺やお前たちを支配している

全能の時間ではあるまいか。 (V.8-30)

プロメテウスの父はゼウス、母はヘラだが、彼は、自分が自我に目覚めたのは、父親のおかげでも母親のおかげでもない。ましてや「われらの父」のおかげでもない。時間の流れのなかで自分は「個」に目覚めたのだという。彼は、自分という「個」の誕生を問題にし、いま自分はここに自分がいると感じている。人が自我に目覚めるときには、「いまここに自分がいる」という感覚が強まる。戯曲断片では、その「今ここに」が強調されている。

ここにわが世界がある。わがすべてがある。

俺には感じられる、ここにいるんだ、と。

わが願いのすべてが

生きた形となって具現しているのは、ここなのだ。 (V.90-94)

この力は俺のものだ、この力をどう使うか、それは俺が決めることだ。

ゼウスが神々の頭かしらだからといって、

もうそいつのために動いたりはしないぞ。 (V.130-132)

後年、ゲーテがフランス革命を激しく批判したことはよく知られているが、劇詩『プロメテウス』にはフランス革命の闘士たちと同じような「内なる力」への強い自負が描かれている。プロメテウスは内なる力を注視している。内なる力が世界を生み出す。内なる力は今ここにある。天上でもどこでもない、今ここにこそ「俺の世界がある。俺の万有がある」。そのとき、彼は「今ここに自分がある」という強い存在感情に満たされる。このような強い存在感情があるとき、彼はこの「存在」には始めも終わりも、過去も未来もないこと、今ここにある「存在」は永遠であることを確信する。

俺たちはみな永遠だ。

いつどこで始まったのかは思い出せず、

いつどこで終わるのかも分からない。

終わりなぞ見えはしない。

今ここにいる以上、俺は永遠なのだ。 (V.161-165)

自分の存在の永遠性を確信しているとき、彼の体内はニーチェのいう「力への意志」に満ち溢れている。いま彼は極度の自己強化 (*Verselbstung*) の状態にある。恋に落ちた人間が内なる炎に向けて全関心を凝集し、それを核として個を形成するのとまったく同じように。

1883年、劇詩断片『プロメテウス』は第二幕の途中まで書かれたものの、未完のままに終わり、その後失われてしまったと思われていた。その原稿が1819年に再発見され、1830年、ゲーテはこれを「生前最後の全集」に収めることにした。その際、彼は、劇詩断片の一年後(1774年)に書かれた頌詩「プロメテウス」を劇詩断片「プロメテウス」の欠けている第三幕の代わりに置いた。しかしこの代置は果たして正しかったのか、この詩はいったいどういう目的で書かれたのか、いまだに多くの謎が残されている。劇詩『プロメテウス』はじつに謎多き難解な作品なのである。

頌詩「プロメテウス」とは正反対に、頌詩「ガニメート」には自己脱却の極致がうたわれている。先行研究でこれまで一再ならず説かれてきたように、頌詩「プロメテウス」と頌詩「ガニメート」は分極性 (*Polarität*) の関係にある。頌詩「プロメテウス」に自己強化 (*Verselbstung*) の結果訪れる陶酔 (*Enthusiasmus*) が描かれているとすれば、「ガニメート」には自己脱却の果てに到来する恍惚 (*Ekstase*) が表現されている。ちなみに、陶酔 (*Enthusiasmus*) とは「憑依」、神が内に宿ること、恍惚 (*Ekstase*) とは「脱自」の意味である。神に満たされているとき、人は陶然とするし、他者のためにわが身を顧みなくなっているとき、人は幸福の絶頂にある。

自己凝縮と自己脱却。両者が生み出す陶酔と恍惚。若きゲーテはそのことを人一倍強く体験し、その不思議を文学作品のなかに書き留めておこうとした。そこで生まれたのが、ひとつには『若きヴェルターへの悩み』であり、もうひとつには劇詩断片『プロメテウス』とその

連れ子である2つの頌詩（頌詩「プロメーテウス」と頌詩「ガニメート」）だった。

ガニメート

春よ 朝焼けのように
君の光は私を包む
春よ わが憧れの君よ
君の聖なる心は
永遠なる暖かさに満ち
かぎりなき恋の喜びもて
わが胸に迫る。
春よ 君はなんと美しいのか。

春よ 君をわが腕に
ひしと抱こう

ああ 君の胸に抱かれたまま
わが恋は募るばかり
春よ 君の花 君の草が
わが琴線に触れる
春よ 君が送るさわやかな朝風は
わが胸の渴きを
燃えるような渴きを癒やしてくれる
春よ 狭霧ただよう谷間から
ナイチンゲールが呼ぶ春よ

行くよ 行くよ
でも どこへ行けばいいのだろう

そうだ 上へ 上へ行こう
雲が下に降りてくる
ゆるやかに降りてくる雲が
恋い焦がれる私を迎えてくれる
こちらにおいで と言わんばかりに
雲よ、君に包まれながら
私は上へ昇る

君に抱かれながら 君を抱きつつ
あの天の上へ
君の胸のなかへ
愛に満ちた父〔ゼウス〕のところへ 私は行こう

ガニメートは古代ギリシア神話に登場する美少年である。ゼウスの給仕役がいなくなったため、ゼウスは美しいガニメートをさらい、オリュンポスの給仕にした。ガニメートとゼウスは同性愛的関係にある。

しかしこの詩は別に同性愛をうたったものではない。たしかにこの詩において、ガニメートが憧れるのは「春」(Frühling、男性名詞)であり、「春」は「わが憧れの君」(Geliebter)と男性形で呼びかけられ、それは最後には「愛に満ちた父」(Alliebender Vater)と同定されてはいるが、それは人ではない。だが、この詩には、恋愛において起こるのに似た感情が描かれている。それは、「自己強化」とは正反対の感情である。恋に落ちた人は、恋人が自分を受け入れてくるなら、恋人のためにすべてを捨て、「自己脱却」する覚悟ができていく。そしてこの自己脱却は、自分を予想もしていなかった高みへと導いていってくれる。「そうだ 上へ 上へ行こう」。恋人が手招きするまま、ガニメートは空の彼方へ昇ってゆく。「雲よ、君に包まれながら 私は上へ昇る」。この世とも思われぬ天の高みにおいて、ガニメートと恋人は一体化する。「君に抱かれながら 君を抱きつつ」。

自己を脱却し、恋人と固く抱擁しあったこのとき、人は至上の幸福、恍惚を感じる。シェリング(『エアランゲン講義』)やハイデガー(『存在と時間』)が説いているように、恍惚において合一は同時に脱自になるのである。

このような体験は自然のなかでも与えられる。美しい自然を目にしたとき、人は自然のなかに自分を委ねる。自己脱却すると、人は自然に抱かれ、自然の細部をくまなく見ることができるようになる。自然はますます美しく浮かび上がる。そこには、恋愛におけるのとよく似た至福の恍惚がある。そしてゲーテはこの頌詩においてそうした恍惚たる自然体験を描いた。彼にとって恋愛体験と自然体験はほとんどひとつのものだったのである。

この詩における「愛に満ちた父」、ゼウスを指示する天空の支配者は、「天にましますわれらの父」のことではない。それは汎神論的な「神なる自然」のことである。そのことを示すべく、作者はわざわざガニメートの恋人を「春」にした。深い自然体験には恋愛体験におけると同様の自己強化と自己脱却がある。作者は暗にそう言っている。これはすでに劇詩『プロメテウス』において、ミネルヴァとの恋愛や「生命の泉」のくだりに描かれていたものだが、自己脱却が自然体験においても起こりうることをはっきりと示しているのが、頌詩「ガニメート」である。頌詩「ガニメート」を書いたとき、ゲーテはすでに確信していた。自然が真に見えるのは、見神体験をしているときだ、と。

『プロメテウス』と「ガニメート」には、それぞれ自己強化と自己脱却が描かれていた。そしてその自己脱却を、ゲーテはヴァイマルに宮廷入りしてから間もなくきわめて強烈な形で経験することになる。1777年6月8日、ゲーテがヴァイマルに移ってから一年半後、ゲーテの妹コルネーリア（1750-1777）が産後の肥立ちが悪く死亡する。じつはゲーテとコルネーリアは特別な関係にあった。それは1776年に書かれたゲーテの戯曲『兄妹』から推測することができる。知人に預けられていたため、たがいに兄妹だとは知らない男女が恋に落ちる。そういう兄妹間の愛がこの戯曲のテーマである。事実、ゲーテは妹コルネーリアときわめて親密な関係にあった。コルネーリアに友人 Schlosser への縁談を持ち掛けたのも兄のゲーテだった。兄に勧められて嫁いだものの、法律家である彼と文学少女だったコルネーリアとの結婚生活はうまくいかず、コルネーリアはヴァイマルにいるゲーテに、「お兄さん、助けて」という手紙を何度も出した。ところが多忙をきわめていたゲーテは、コルネーリアに返事を書くことはなかった。妹は妊娠した、子どもができた、よかった。軽くそう思っていたのかもしれない。

だが、そうこうしているうちに、妹のコルネーリアは突然死んでしまった。ゲーテの嘆きようは大変なものだった。「ああ、何ということだ、大好きな妹が死んでしまった。コルネーリアがいなくなってしまった。俺は何もしてやれなかった。俺が殺してしまったようなものだ」。そうゲーテは嘆いた。もう何もかもが手につかなかった。悲しみに耐え、胸のなかの叫びを抑え、できるだけ冷静にふるまわなければならなかった。やがて冬が来ると、彼はアイススケートをして毎日をすごした。ドイツは寒いので、冬になると池や湖がよく凍結する。そんな池のひとつでゲーテはアイススケートをした。そしてやがて彼はアイススケートが上手になった。アイススケートをしていると、何も考えず、心のなかを空っぽにすることができた。心が空っぽになるのは大きな救いだった。そしてそうしていると、やがて見えてくるものがあつた。それを彼は「純粹」と名づけた。

ゲーテの日記や書簡の中では、妹の死後、「純粹」についての言及が急速に増えはじめる。「聖なる運命よ、私にも純粹をいきいきと享受させてくれ」（日記1777年11月）、「いつも変らぬ純粹な心持。自分自身や家庭についての美しい解明。静けさと叡智の予感」（同1778年2月初）、「植物のごとく無為に静かに純粹に暮らしている」（同4月初）、「このところ心中おおむねいたって静か……、さまざまな事情についてのかなり純粹な想念」（同12月末）、「このところ天候と同じく澄んで純粹で楽しい」（同1779年3月29-31日）、「当地で私はラーヴァターと一緒に生活を純粹に享受している。彼の友達の集まりには天使のような静けさと安らぎがある」（クネーベル宛書簡、1779年11月30日）、「日常的な仕事は安らかに純粹に進んでいる。……深い静けさほど素晴らしいものはない。私はこの静けさの中で俗世間には背を向けて暮らし、成長し、そして世間の人々が火や剣をもってしても私から奪うことのできないものを勝ちとるのである」（日記1780年5月13日）。

「純粹」や「静けさ」や「安らぎ」について語られた一連の記述のなかでも最も注目すべきは、1779年8月7日の日記のくだりであろう。ここで彼は人生を回顧し、これまでの自分はなんて短兵急で、情熱を浪費してばかりいて、独りよがりだったことだろうかとわが身を深く反省している。そしてそれに続いて彼は「私が口の中に入れる一片の食物にまでも及ぶ純粹理念（die Idee des Reinen）が、私の中で益々明断になるように」と記している。

ここでゲーテが見ているのは、眼の前の食物。その一片をフォークで取り、それを口に入れる手とその動きである。大事なのはこの動きと、周囲を領する静けさである。「私」という意識はない。「私」が意識されるのは、食物が口に入ったときだ。

食物を口にするまで、「私」はいない。食物を口にするとき、眼は、食物を口に入れる「私」の動きに気づく。だが、その眼は「私」の身体と同じではない。「私」の行為を単にじっと注視している眼である。

このときゲーテは、「私」よりももっと大切なものがあることを知った。妹が死んで自分は悲しかった。悲しいなかで、自分は自己を強く意識した。妹がいなくなった自己を強く意識した。妹を助けてあげなかった自分を責めた。だが、その後、そうした自己意識も罪の意識も消え、茫漠たる喪失感だけがあたりを支配し、自分は自己を失い、どうしてよいか分からなくなった。そんなとき、自分はアイススケートをして時をすごした。アイススケートをする前は、自分はさまざまな思いに苛まれ、意識が混乱していた。自分は自己を失っていた。だが、アイススケートをしているうちに、自分はいつしかぐだぐだした状態を乗り越えることができた。

いま、眼の前にある一片の食物が口のなかに運ばれていく。そこにまだ自己意識はない。毅然と歩む「私」はいない。だが、このとき、この場所を静けさと、とても清々しい空気が支配している。それが見える。妹の死、悲しみ、複雑な感情、それらすべてをはるかに超脱した空気が。そこでは自分の個人的なさまざまな思いが全部拭い去られ、心が空っぽになっている。そして空っぽになったことによって自分は救われた。では、この空っぽの美しい澄みきった世界を何と名づけようか。考えたあげく、ゲーテはそれを「純粹」と名づけた。

ゲーテは「純粹」という語を用いたが、われわれ日本人ならおそらく別の語を用いるだろう。「空」や「無」である。禅仏教でいう「空」や「無」である。ゲーテは禅も仏教も知らなかったから、これを「純粹」と名づけるほかなかったが、このときゲーテは「無」に近い心境に到達したのではなかったか。「無」であるからこそ、その心境は「静けさ」や「安らぎ」に包まれていたのではなかったろうか。

座禅ではなくても、日本人の生活では「無」の心境が重視される。たとえば茶道でもそうだ。茶道において主は客に一服の茶を差し出す。客は茶器を右手で取り、眼のやや下に掲げ、左側にやや回してから飲む。その動作にはどこにも無駄がない。茶器を鑑賞し、茶を飲むだけの最小の動作だ。

最小の動作と、それを見る眼だけが茶室にある。

最小の動作とは、本質的な動作でもある。本質以外の余計な動きがないから、それは純粹で本質的である。簡素といってもよい。そしてそうするように求めるのが茶道である。

それはまたアルス・シムラが求めるものでもあるだろう。たとえば「私が花霞という着物を織る」とする。「花霞」という名前は大事ではない。「私」も大事ではない。大事なのは「着物を織る」という動きである。いや、織られるものは着物ではなくて、のれんかもしれない。すると「私が花霞という着物を織る」という文章のうち、大事なのは「織る」という動きだけだということになる。このように夾雑物をすべてそぎ落とすと、「織る」という動きだけが浮かび上がってくる。無心になって織ること、それがアルス・シムラで求められていることである。

そしてゲーテがその自然研究で「根本現象」と呼んだものも、茶道の「いただく」やアルス・シムラの「織る」にきわめて近いものである。

当初、ゲーテは「根本現象」を「純粹現象」と呼んでいた。それはおそらく彼の若い頃の「純粹」理念の体験に由来している。たとえばお茶室でお点前をしているとする。未熟な人には無駄な動きが多いだろう。ところが熟達者がするお点前には無駄な動きがない。このように無駄な動きをそぎ落としたもの、お点前の本質だけを浮かび上がらせたものが「純粹現象」ないし「根本現象」である。

「純粹」理念を体得したとき、ゲーテは迷い箸をせず、眼の前の食物を適切な速度で口に運んでいた。このありふれた動作のなかに「純粹」があり、「真実」がある。そうゲーテは考えていたであろう。

世界はじつは単純で本質的な動きから成り立っている。

家では父と母がニコニコ笑っている。弟がいたずらをして叱られている。

お嫁に行く姉は、父母さんの前で正座して、「お父様、お母様、長いこと、ありがとうございます」と挨拶する。

学校では、先生が眠っていた生徒を叱っている。

学校の校庭では生徒たちが野球をしていて、ヒットを打った少年が今二塁ベースに向かって走っていく。

こうしたありふれた情景が、「純粹」理念を体得したゲーテにはきわめて尊いものに見えたにちがいない。ゲーテは『イタリア紀行』のなかで、同じようなこと、似たようなことを何度も繰り返し記している。それを退屈と思う読者も多い。だが、じつはありふれたものこそが尊い。ありふれたものなかにこそ真実がある。ありふれたものは本質的なものの反復である。ゲーテにはそのことがよく分かっていた。

ありふれた情景の反復を執拗に描いたのは、小津安二郎監督だった。小津映画では台詞の反復が何度も出てくる。その台詞がさもおしいかのよう。

映画『晩春』のなかで大学教授の周吉（笠智衆）は、嫁にいく娘の紀子（原節子）に向かって繰り返し言う。「なるんだよ、幸せに」「なれるよ、きつとなれるよ、お前ならきつとなれるよ」と。そして映画『秋刀魚の味』のなかで若妻の秋子（岡田茉莉子）は、夫の幸一

(佐多啓二)にゴルフクラブを売りにきた同僚の三浦(吉田輝雄)に言う。「月賦だってダメよ、ダメ、ダメ」と。

まるでこれらのシーンは、会話における言葉の反復を楽しむためにのみあるかのようだ。小津は、これら反復される台詞のなかにある日常をいつくしみ、それを映画にした。平凡な日常生活のなかこそ真実がある、と示すために。他のどの監督にも真似のできなかった偉大な仕事である。

言うまでもなく千利休は、小津安二郎よりもはるかに前に、日常生活のなかにある真実を浮かび上がらせ、それを茶道という「道」にした。だから千利休は偉大である。

ゲーテも同じである。反復される日常的で本質的な現象をいつくしむようにして見ること、それが大事だ。これがゲーテの根本現象の根底にある思想、当たり前のように、たいていは忘れられている思想なのである。

3

「純粋」を夾雑物のない本質的な動きと捉えれば、その後、ゲーテが自然を研究するに際しても「純粋な動き」を注視したことが分かるだろう。自然界における「純粋で本質的な動き」、それをゲーテは「根本現象」(Urphänomen)と名づけた。

純粋な直観は私たちに完全に確信させ安心させてくれますが、一方、**類推**(Analogie)を用いても、私たち自身や他の人々を一時的に説得し、納得させてくれるにすぎません。つきつめて言えば、**根本現象**は多様な結果を解明してくれる**根本的な法則**と同等視されるべきではなく、**そのなかに多用なものが直感される根源的な現象**(Grunderscheinung)であると考えられるべきなのです。

(C・D・フォン・ブッテル宛書簡、1827.5.3)

根本現象は「法則」ではない。「現象」だとゲーテはいう。「現象」がイタリックになっていることに注意してほしい。法則とはたとえば言葉や方程式で言い表されるものだが、それに対して「現象」は目に映じる自然の動きのことである。先に述べた「純粋」理念の経験においてゲーテは、一片の食物を口に入れる動作のなかに「純粋」を見たが、その彼はいまや自然の動き、さまざまな現象のなかにもその純粋なすがた、本質的なすがたを見てとることができるようになっている。

1810年に刊行された『色彩論』のなかでゲーテは「根本現象」の語を始めて用いたが、それ以前にはこれを「純粋現象」と呼んでいた。1898年の自然学論文のなかでは、「現象」には「経験的現象」「学問的現象」「純粋現象」の3つがあると記されている。

純粋現象 これはありとあらゆる経験、あらゆる実験の結果として究極的な位置を占

めている。これは決してそれだけで孤立していることはなく、連続した系列的現象として示される。これを表現するために人間の精神は、経験界では揺れ動いているものを規定し、偶然的なものを除去し、不順なものを排除し、混乱したものを解きほぐして、ついに未知のものを発見するのである。 (LA I-11, 39f.)

自然とは、方程式でも法則でも物質でもない。自然とは現象である、生命を伴った動きである。これがゲーテ自然観の基本的な立場、自然現象学とでもいうべき立場である。ところが近代物理学は正反対で、たとえば物理学者の武谷三男^{たけがにみつお}は、物理学研究には3段階があると言っている。現象論的段階、実体論的段階、本質論的段階の3段階である。武谷は、他の多くの物理学者と同様、物理学者というものは現象を見ているだけではダメで、現象の奥に進まなければならない、と考えていた。現象の背後に実体がある、実体の背後に本質がある。そう考えるのが近代物理学である。だが、ゲーテはそう考えない。現象の背後には何もない。現象の背後を求めることは、現象から目を逸らすことである。ひたすら現象を注視せよ、現象から目を逸らすな。そうすれば本質は現象の背後にではなく、現象のただなかに現れてくるだろう。現象から目を逸らしたすべての行為、すべての学は墮落である。近代はそんな墮落した学問に満ちている。だからこそ、自分はあえて自然科学の世界にまで足を踏み入れたのだ。おそらくゲーテはそう考えていた。そこからゲーテの形態学や色彩論という独自の世界が開かれることになるのだが、それについては次回以降にお話することにしよう。